赤い椿

前岡光明

誰にも懐かしい故郷があるだろう。生まれた土地、幼い頃過ごした土地、育った土地、などなど。私は昭和十五年十月四日、中国大陸、天津（てんしん）で生まれた。天津仏租界日本陸軍病院と、古い戸籍の記載でしか知らない。敗戦で大連（だいれん）から引き揚げてきた。妹が生まれた町の名は覚えてない。塀で囲まれたマニラロープ工場の敷地内の宿舎にいた。そこに勤めていた父が現地応召し、母と三人の幼児が残された。ある夕方、母が駆け込んできて、「今晩、出発するわ」と叫んだ。「日本が戦争に負けるので、明日、中国人が襲ってくるという連絡があったの」暗闇の中、駅に向かった。満一歳の妹は母に負ぶわれ、五歳の私は大きな風呂敷包みを提げ、二つ下の弟の手をつないでいた。駅で切符を買うのが大変だったようで、「日本人の駅長さんで助かった」と母が言った。待合室で母に起こされ、荷物を持ってプラットホームに向かった時の眠たかったこと。列車は空いていて、四人がまとまって座れた。朝になって、若い日本の兵隊さんが一人乗り込んできて、同じボックス席に座った。「自分は伝令に行くところだ」と語った。母が「これから日本に帰る」と言い、「気を付けてください」と話していた。車窓に日本軍の飛行場があった。飛行機の姿はなかった。

それから列車は速度を落とし、何度か停った。前の列車が匪賊に襲撃されたのだ。「もし、襲われたら、座席の下に隠れるのよ」と、母は私と弟を実地に潜らせた。駅に着いた。駅舎が襲撃され壁が吹っ飛んでいた。ガラスの破片が体中に刺さって血まみれだったと話しているのを聞いて、私は身震いした。

列車は動かなかった。私たちは歩き出した。同じような家族が何組かいて、いっしょに行動した。ある時は丘の畑に身を隠し、眼下の街道をソ連軍の戦車の隊列が私たちを追い抜いて行くのを眺めていた。また、大きな倉庫に身を隠したことがあった。赤ん坊は泣き出すので口を覆われ、それで亡くなった子もいたと後で聞いた。妹は無事だった。そして、大連に辿り着いた。何日もかかった行程ではなかっただろうが、母は三人の幼児を抱え、食料、水も持たず耐えた。

大連には父の勤めていた会社の工場があって、知人がいた。あの当時、大連では、いち早く日本人の有志が結束して労働組合を組織し、ソヴィエト占領軍と交渉し日本人の自治を図った。金持ちから無理やりお金を拠出してもらって、奥地から大連に集結してくる日本人たちを保護した。帰還船に乗る順番の決定権を組合が握っていたから、金持ちは不承不承、従ったそうだ。しかし、男性は保護の対象外だったから、奥地の開拓団からやっと

大連にたどり着いた若者が絶望して公園で首吊った。（大きくなって読んだ、「大連・空白の六百日」富永孝子著　新評論　による。）

私たちは組合に助けられた。大きな倉庫の床に大勢がごろ寝の生活だった。一組の布団に家族が潜り込んだ。コーリャンのおかゆは食べにくかった。赤ん坊の妹は特別配給の白米のおかゆを食べていた。仕事を斡旋してもらった母は、街頭でピーナッツや搾りかすの蒸しパンを売っていた。着の身着のまま、風呂なんかなかった。

正月だったのだろう。父の同僚の家から母がブリ大根煮をもらってきた。あんなごちそうはなかった。

大連からの引揚船は遅れた。本土に密航して引揚船を要請した勇志達がいたそうだ。

春先、博多に引き揚げてきた。検疫所で、シラミ退治で全身、頭まで真っ白にＤＤＴを浴びた。駅のホームの売店で母はミカンを見つけ、「これがミカンよ。日本に帰ってきたのよ」と興奮し、私たちに食べさせてくれた。列車はひどい混雑だった。列車を降りる時、私は窓から降ろされた。和歌山の紀ノ川沿いの、母の実家へ向かった。小川のほとりを歩いていた。星が出てきた。「お父さんが無事帰ってますように、あのお星さんにお祈りしましょう」　無事たどり着いた。すぐに、父が駆け付けてきた。父は、引揚船の報道があるたびに私たちの名を探したが、見つけられなかったと言った。

母は、この学校教師の家の養女だった。母は幸薄い人だった。私たちは同居を拒否された。母は結核に罹っていたのだ。

大阪府の岸和田の、父方の親戚の家でお世話になった。私は岸和田の小学校に入学した。間もなくして、近くの淡輪の引揚者住宅に移った。楠の大樹の神社近くだった。大きくなってからも、南海電車で通るたびに、「あそこだ」と大きな楠を目で追ったものだった。

敗戦で大勢の日本人が命からがら大陸から引き揚げてきた。混乱の祖国は、そんな引揚者を受け入れる余裕はなかった。そんな中で、大阪府は困窮した引揚者のために淡輪に住宅を用意してくれ、私たちは助かった。私は大阪府に頭を下げる。

父が末っ子だったからだろう、和歌山から祖母が手伝いに来てくれていた。祖母は、妹が生まれるときに、満州にも来てくれた。私は絵本を読んでもらった記憶がある。あの時は、祖母は、すぐに日本に戻っていてよかったのだ。

祖母は私たちを連れて、やや山よりの南海電車の線路近くに夕陽を見に行った。瀬戸内の淡路島の向こうに沈む赤い大きな夕陽。山国暮らしの祖母は満州の夕陽を思い出していたのだろうか？

淡輪小学校の二年を終える頃だった。家のそばの道端に太い幹の赤い椿が咲いていて、私はよじ登って一輪手折った。ガラスコップに挿し、畳で寝ている母の枕元に置いた。あ

とで、私は祖母に叱られた。椿は花首がポトリと落ちる。武士の打ち首のようで縁起が悪い、病室に飾ってはいけない。

それからまもなく、母は亡くなった。「お母ちゃんが亡くなった」と、泣きながら、弟が私の教室に呼びに来た。母が亡くなる前、枕元の私に、「兄弟仲良く暮らすんだよ」と言った言葉は忘れてない。線路の反対側の墓地。大勢で棺を担ぎ、土葬した。

淡輪には親戚は居ない。何年かして、墓は和歌山の父方の墓地に移された。伯父がそういう手続きをしてくれた。母の墓石はそのままで、向こうに新しい墓石を建てたのだ。

母は、自分の命と引き換えに、五歳の私を頭に三人の子供を大陸から連れ帰った。私たちは残留孤児を免れた。今思えば、あの大連の倉庫で引揚船を待つ仲間には、赤ん坊も、私たちのような子供もいなかった。そして、私たちは周りの大人たちに、あまり言葉をかけてもらわなかった。あの中には我が子を手放してきた人もいたのだ。

それから間もなく、三年生になるとき、私たちは父の実家のある、和歌山の長谷毛原村（はせけばらむら）（現美里町）の伯父の家に預けられた。妹はそこの養女となっていた。

そのころ、父は再婚し、元の会社に復帰していた。そして、岩手県一関市でマニラロープの工場を立ち上げた。小学四年生から高校を出るまで過ごした岩手県一関が、私にとって一番の故郷である。父も母も関西人だったから、幼少時代の私は関西弁だった。一関に来て、いわゆるズーズー弁を懸命に覚えた。「お前はどこの出だ？」と、問われれば、「おらは、一関だべ」と答える。親戚、縁者は居ないが多くの友人がいる。私は、東北人として粘り強く生きてきた。

私はダム技術者になった。全国を転々としたので、二人の息子の生まれた土地は異なる。でも、子供たちにとっては、小学校から育った、今いる町田市がふるさとである。

私は十年ほど前、市内の霊園に墓を造った。多摩の丘陵地で景色のいいところだ。信心の薄い私は、自分の遺骨ならどこかへ散布してもらっていい。だが、長男だから、父と義母の遺骨を納める墓が要った。お盆とかお彼岸に墓参りするたびに、私は実母のことを考える。実母の墓は、父の実家の墓に移されたが、淡輪の墓地には、関西に行くたびに参っていた。でも、もう二十年ほど行っていない。私の子供たちは私の実母の墓のことは知らない。和歌山の父の実家の墓も、過疎の村で間もなく絶える。墓なんてむなしいものだ。こうやって核家族の社会になって、皆が家に縛られなくなると、先祖の墓なんて守れなくなる。この霊園墓地は借地なので管理費を払わなくなったらそれまでだ。

大陸のことは別にして、どの土地を思い出しても懐かしい人の顔が目に浮かぶ。どの土地も私にはふるさとだ。私にはもうあちこち懐かしい地を訪ねる余裕はない。一関も古希の同期会を最後に訪ねてない。

老いた今、もう一度訪ねるとしたら、どこへ行く？　と問われたら、淡輪の母の墓前だ。二十五年ほど前に訪ねたとき、私たちが住んでいた引揚者住宅はまだあった。家の近くのあの赤い椿の樹もあった。胸高で直径二十cmほどある、椿にしては太い樹だった。枝が切り払われ、緑の枝が小さくまとまっていた。まだ生きているだろうか？

もう、あの墓地の墓石は無縁仏で合葬されてしまったかもしれない。それでも私は母が眠るあの場所で母に語りたいことがある。今、私は母に、八十一才になったことを報告したい。弟は、元気で過ごしてきたが、昨年病で亡くなった。妹は七十八で元気でいる。私たち三人は離れ離れであっても、幸せな家庭を築いた。

あれから七十五年経った、今、思えば私たち日本人は満州の地へ侵略したのだ。軍部の主導のもと日本は中国の地に、満州国を樹立した。貧しい山村の若者を鼓舞し開拓団として送り込んだ。現地の人々の土地を奪ったのだ。

私たちは命からがら祖国に戻ることが出来たが、そんな日本人は、自業自得と言われても仕方がないだろう。私は大きな声で叫ぶ。

「他国を侵略してはならない」

「戦争をしてはならない」

「隣国の人達との付き合いは、寛容であれ」